

岡山県岡山市方言



【岡山県の方言区画】岡山県は中国方言圏の東端に位置する。近畿地方とは古来より山陽道などを通じて交通があり、言語的にも中央語史上の古い特徴を多く残し、現在も近畿方言圏の影響が強い。ただし、語中のガ行子音が鼻音ではなく破裂音である点や、語アクセントにおいていわゆる「式」の対立がなく、下降の有無・位置が弁別的なアクセント体系である点は、近畿地方の伝統的方言と大きく異なる。

岡山県は備前、備中、美作の三国からなる。県内の方言差は緩やかであるが、旧三国のそれぞれの方言特徴によっておおそ区分されるとともに、中国山地から瀬戸内海島嶼部に至る備中はさらに南北に二区分される。近畿・四国・山陰に接する県の周辺部にはそれぞれの隣接地域に近い方言特徴を示す地区もある。

県北部の美作方言と備中北部方言、県南部の備中南部方言と備前方言は連母音アイの融合の有無の点で異なる。県北部では連母音アイの融合があまりみられず、県南部では連母音アイの融合が盛んに行なわれる。また備中北部方言と美作方言の一部が名詞の多くにおいて東京アクセントと同じアクセント型を示すのに対し、その他の地域では体系的には東京式アクセントであるものの、「夏が」を頭高型で発音

するというように一部東京アクセントと異なるという差異もみられる。

県西部の備中北部・南部方言、県東部の美作方言と備前方言の県内方言東西の相違としては「せ」・「ぜ」の発音が挙げられる。備中方言では「せ」・「ぜ」をシエ[se]・ジェ[dze~ze]と発音することが盛んである。美作方言と備前方言の多くの地域ではこのような発音はあまりみられない。備前方言西南部においてはシエ・ジェと発音するか否かに個人差がある。

【岡山市方言について】岡山県の政治・経済・文化の中心である岡山市は、備前方言地域の西部にあたることから、岡山平野つづきの備中とともに県南の共通方言をなす面も多くみられる。

音韻的な特徴として「せ」の発音にセ[se]とシエ[se]が存在し、個人差が大きいことが挙げられる。連母音の融合が多くみられ、/ai/, /oi/, /ui/がそれぞれ[e:] [i:]の長母音となる。ただし連母音/ai/は高年層ではアエー[a:]であり、中年層以下ではエー[e:]となる。助詞「は」「を」「へ」と前接する体言の融合も盛んであり、「チャー」[tʃa:] (手は)、「テュー」[tju:]、「テョー」[tjo:] (手を)、「ヤメー」(山へ) などとなるが、若年層には聞かれない。

文法的な特徴としては、「デーガ スリヤー」(だれがするか)、「ドケー イクンナラ」(どこへいくのか)のような、疑問詞を受けて仮定形で文末をしめくり、疑問、ないしは反語を表す「疑問詞の係り結び」(虫明 1982)がある。

【表記について】上述したように、岡山市方言には連母音/ai/にアエー[a:]とエー[e:]の二つの発音がある。これは基本的に世代差によるものであり、アエー[a:]の発音は高年層に限られるため、表記としてはエー(ケー、セー等)に統一して示す。

【調査概要】本稿の記述は、岡山市で生育し、調査時も居住する高年層話者(1934年~1948年生まれ)への聞き取り調査、及び岡山市で生育した筆者(1991年生まれ)の内省にもとづく。用例は聞き取り調査によって得たものである。共通語訳は筆者による。

岡山県岡山市方言の活用表

《動詞》

		多段一般型 書く	多段特殊型 死ぬ	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定 非過去	カク	シヌ シヌル	ミル	クル	スル
	断定過去	カイト ケータ	シнда	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ	シネ	ミー	ケー	セー
	禁止	カクナ	シヌナ	ミルナ ミナ	クルナ クナ	スルナ スナ
	意志	カコー	シノー	ミョー ミュー	コヨー コー	ショー ショー
	推量	カクジャロー カコー	シヌジャロー シノー シヌルジャロー	ミルジャロー ミョー ミュー	クルジャロー コヨー コー	スルジャロー ショー ショー
	否定意志 ・ 否定推量	カカマー カクマー	シナマー シヌマー シヌルマー	ミマー ミルマー	コママー クルマー	セマー スルマー スマー
接 続 類	連体 非過去	カク	シヌ シヌル	ミル	クル	スル
	連体過去	カイト ケータ	シнда	ミタ	キタ	シタ
	中止	カITE	シnde	ミTE	キTE	シTE
	仮定	カケバ カキヤ(一) カイトラ	シネバ シニヤー シヌレバ シヌリヤー シндаラ	ミレバ ミリヤ(一) ミタラ	クレバ クリヤ(一) キタラ	スレバ スリヤ(一) シタラ
派 生 類	否定	カカン	シナン	ミン	コン	セン
	とりたて 否定	カキヤーセン	シニヤーセン シヌリヤーセン	ミリヤーセン	クリヤーセン	スリヤーセン
	丁寧	カキマス	シニマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス カカセル	シナス シナセル	ミサス ミサセル ミラセル	コサス コサセル コラセル	サス サセル
	受身	カカレル	シナレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能肯定	カケル	シネル	ミレル ミラレル	コレル コラレル	《デキル》
	可能否定	カケン ヨーカカン	シネン ヨーシナン	ミレン ヨーミン	コレン ヨーコン	デキン ヨーセン
	尊敬	カカレル カキンサル	シナレル シニンサル	ミラレル ミンサル	コラレル キンサル	サレル シンサル
	継続	カイトル カキョール	シンドル シニョール	ミトル ミョール ミュール	キトル キョール	シトル ショール
	希望	カキテー	シニテー	ミテー	キテー	シテー
	のだ	カクン(ジャ)	シヌン(ジャ) シヌルン(ジャ)	ミルン(ジャ)	クルン(ジャ)	スルン(ジャ)

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak·u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik·uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	嗅ぐ kag·u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das·u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac·u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin·u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob·u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom·u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir·u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/ø	買う ka(w)·u	コー-タ	wをø(子音なし)にし、wの前の母音を、それがaの場合はoに変え、R(長音)にする。
	誘う saso(w)·u	サソー-タ	
	言う ju(w)·u	ユー-タ	

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生 [ガクセー] (だ)
終 止 類	断定非過去	アケー	シズカ(ジャ) シズカナ	学生(ジャ)
	断定過去	アカカッタ アケカッタ	シズカジャッタ シズカナカッタ	学生ジャッタ
	推量	アケージャロー アカカロー アケカロー	シズカジャロー シズカナカロー	学生ジャロー
接 続 類	連体非過去	アケー	シズカナ	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ アケカッタ	シズカジャッタ シズカナカッタ	学生ジャッタ
	中止	アコーテ	シズカデ	学生デ
	仮定	アカケリヤ アカカッタラ	シズカナラ シズカジャッタラ	学生ナラ 学生ジャッタラ
派 生 類	否定	アコーネー	シズカニネー シズカジャネー	学生ジャネー
	なる	アコーナル	シズカニナル	学生ニナル
	丁寧	アカイデス	シズカデス シズカナデス	学生デス
	のだ	アケーン(ジャ)	シズカナン(ジャ)	学生ナン(ジャ)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」)と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型にはa類のうち「書く」・「居る」類、一段型にはb類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オ段の5形、および、音便形がある。融合によってア段拗音・オ

段幼音となることもある。「カク」(書く)の場合、カカ-ン(kak·a-N)、カキ-テー(kak·i-teR)、カク(kak·u)、カケ(kak·e)、カコ(ー)(kak·o(R))、カイ-タ(kai-ta)、カキヤ- (kak·jaR)、カキヨ-ル(kak·joRru)など。また、語幹末子音には、k(カ行)、g(ガ行)、s(サ行)、t(タ行)、b(バ行)、m(マ行)、r(ラ行)、w(ワ行)がある。語例は、表「多段型動詞の基幹音便形」を参照。

多段型の特殊なものとして、語幹末がn(ナ行)

の「シヌ・シヌル」(死ぬ)と「イヌ・イヌル」(帰る)がある。「書く」などを多段一般型とするのに対し、この2語を多段特殊型とする。「シヌ・シヌル」を例にすると、否定形シナ-ン(sin-a-N)、希望形シニ-テー(sin-i-teR)、断定非過去形・連体非過去形シヌ-ヌ(sin-u)など、多くは多段型と同じ活用形となるが、断定非過去形・連体非過去形シヌ-ル(sin-u-ru)と仮定形シヌ-リャー(sin-u-rjaR)、および、前者がベースになる推量形シヌ-ル=ジャロー(sin-u-ru=zjaroR)などで、ウ段形シヌ(sin-u)にラ行で始まる接辞が付く形が現れる。古典語の「ナ行変格活用」の特徴を持つと言える。なお「イヌ・イヌル」は若い世代には使用されない。

一段型には、ミ-ル(mi-ru)、オキ-ル(oki-ru)など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル(ne-ru)、アケ-ル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の活用形のうち、多段型のr語幹動詞に対応した形は、「ミル」を例にすると、断定非過去形ミ-ル(mi-ru)、仮定形ミ-リャー(mi-rjaR)、ミ-レバ(mi-reba)、受身・可能・尊敬形ミ-ラレル(mi-rareru)、可能形ミ-レル(mi-relu)のほか、とりたて否定形ミ-リャー=セン(mi-rjaR=seN)がある。とりたて否定形のこの形は、仮定形との平準化によって生まれたもので、r語幹化が進んだ形とも言える。

不規則な活用をする動詞として、「クル」(来る)、「スル」(為る)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ(k-i-ta)、ク-ル(k-u-ru)、コ-ン(k-o-N)などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段にわたる。「コイ」の連母音の融合により、「ケー」(k-e-R)のようにエ段ともなる。「スル」は、サ-レル(s-a-relu)、シ-タ(s-i-ta)、ス-ル(s-u-ru)、セ-ー(s-e-R)のように、基幹が「サ」「シ」「ス」「セ」の4段にわたる。「スル」は、ショー(s-joR)のように融合によりオ段拗音となることもある。「クル」「スル」のとりたて否定形も、ク-リャーセン(ku-rjaR=seN)、ス-リャーセン(su-rjaR=seN)となり、この点でr語幹化が進んでいる。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

「書く」「見る」「来る」「する」は「カク」「ミル」「クル」「スル」となる。多段特殊型の動詞は「シヌ」

など共通語と同じ形と、「シヌル」などの形がある。

- ・キンギャー エサーヤラント スグ シヌル。
(金魚は餌をやらないとすぐ死ぬ。)

〈断定過去形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に「タ」を後接させる。多段型w語幹の「買う」「言う」は「コータ」「ユータ」のように音便化する。高年層には「書いた」の連母音aiが融合し、eRと変化した「ケータ」も聞かれる。

- ・テガミュー ケータ。(手紙を書いた。)

古くは多段型s語幹の「落とした」「残した」がイ音便化した「オトイタ」「ノコイタ」、「食った」「行った」の促音が脱落した「クタ」「イタ」なども聞かれたようであるが(鏡味 1992)、現在はあまり聞かれない。

〈命令形〉

多段型動詞には共通語と同形の「カケ」があるが、一段型動詞は「ミー」(見ろ)「オキー」(起きろ)のように基幹(=語幹)を長音化した形、「来る」「する」はエ段基幹を長音化した形の「ケー」「セー」となる。

- ・ケーカラ コケー ケー。(これからここへ来い。)

- ・ハヨー シゴト セー。(早く仕事をしろ。)

女性は「カカレー」「ミラレー」のように、尊敬のレル、ラレルの命令形を親愛表現として用いることが多い。

- ・ハヨー テガミュー カカレー。(早く手紙を書きなさい。)

高年層には「カキンセー」「ミンセー」のように、尊敬の意を表す「ンサル」(なさる)の命令形「ンセー」(なさい)を用いた形も聞かれる。これは命令のニュアンスがやや弱く、言い聞かせに近い。

- ・メーニチ ニュースオ ミンセー。(毎日ニュースを見なさい。)

〈禁止形〉

断定非過去形に「ナ」が後接した形をとる。「見る」「来る」「する」のような断定非過去形の末尾が「ル」である動詞は「ミンナ」「クンナ」「スンナ」のように撥音化する場合も多い。高年層には「ミナ」「クナ」「スナ」のようにルが脱落する形も聞かれる。なお、「切るな」などのr語幹動詞は「キンナ」にはなる

が「キナ」とはならない。

- ・ヤッチモネー バングミヤコ {ミルナ/ミンナ/ミナ}。(くだらない番組なんか見るな。)

命令形同様、女性は「カカレナ」「ミラレナ」のように尊敬のレル、ラレルを親愛表現として用いることが多い。

- ・キタネー ジオ カカレナ。(汚い字を書くな。)

〈意志形〉

「カコー」「シノー」のように多段型の基幹オ段の長音形、一段型動詞と「来る」、「する」では「ミヨー」「コヨー」「シヨー」のように基幹に「ヨー」が後接する形が用いられる。

高年層には中央語の古形の残存がみられ、「ミュー」(見よう)、「コー」(来よう)、「シヨー」(しよう)などが聞かれる。「シヨー」は他の類と同様に「ヨー」が後接したことが想定できるためか、若い世代からも聞かれる。

- ・ケーカラ テレビデモ {ミヨー/ミュー}。(今からテレビでも見よう。)
- ・マタ コケー {コヨー/コー}。(またこへ来よう。)
- ・ケーカラ シゴトー {シヨー/シヨー}。(今から仕事をしよう。)

〈推量形〉

推量形では意志形と同形のもののほか、断定形に「ジャロー」を後接させた「カクジャロー」「ミルジャロー」もある。

- ・タローガ テガミュー {カコー/カクジャロー}。(太郎が手紙を書くだろう。)

〈否定意志・否定推量形〉

否定意志・否定推量形は「マー」によって表される。「カクマー」「ミルマー」「クルマー」「スルマー」のように断定非過去形に後接するほか、多段型動詞は基幹ア段形に後接した「カカマー」、一段型動詞は基幹に後接した「ミマー」、「来る」は基幹オ段形に後接した「コマー」、「する」は基幹エ段形に後接した「セマー」がある。

- ・モー テガミヤー {カクマー/カカマー}。(もう手紙は書かないようにしよう。)

否定推量形には否定形に「ジャロー」が後接した「カカンジャロー」などの形もある。

- ・タローワ テガミュー {カクマー/カカマー/カカンジャロー}。(太郎は手紙を書かないだろう。)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形である。「書く」「見る」「来る」「する」は「カク」「ミル」「クル」「スル」となる。

- ・フデデ テガミュー カク ヒトモ オラーナー。(筆で手紙を書く人もいるだろうね。)
- ・テレビュー ミル トキヤー モットハナレー。(テレビを見るときはもっと離れる。)

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形と同形である。多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に「タ」を後接させる。

- ・コノ ホンオ カイト ヒトニ オータ。(この本を書いた人に会った。)
- ・テレビュー ミタ ヒトカラ レンラクガアッタ。(テレビを見た人から連絡があった。)

〈中止形〉

中止形は「テ」によって表される。多段型動詞では基幹音便形、一段型動詞では基幹、「来る」では基幹イ段形「キ」、「する」では基幹イ段形「シ」に後接する。

〈仮定形〉

共通語と同様に「バ」を後接させる「カケバ」などの形と、「タラ」を後接させる「カイトラ」などの形も聞かれるが、バ形の融合形「カキヤ(ー)」などが多く用いられる。

- ・ケーカラ テガミュー {カキヤ/カケバ/カイトラ} マニアウジャロー。(これから手紙を書けば間に合うだろう。)

なお、疑問詞疑問文において仮定形で文末をしめくくる「デーガスリヤー」(だれがするか)、「ドケーイクンナラ」(どこへいくのか)のような「疑問詞の係り結び」(虫明 1982)の用法があるが、現在は疑問よりも特に反語の用法で卑罵語として使用されることが多い。

〈否定形〉

否定形は「ン」によって表される。多段型動詞では基幹ア段形、一段型動詞では基幹、「来る」では基幹オ段形、「する」では基幹イ段形が後接し、それぞ

れ「カカン」「ミン」「コン」「セン」のようになる。

過去の否定形は非過去否定形に「カッタ」を後接させて「カカンカッタ」のようになる。また、非過去の否定形の「ン」に代えて「ナンダ」を後接させて過去の否定形を表す「カカナンダ」のような形もあるが、若い世代にはあまり聞かれない。古くは「ザツタ」を後接させ、「カカザツタ」という形もあったが(虫明 1982)、現在はあまり聞かれない。

- ・テガミュー {カカンカッタ／カカナンダ}。
(手紙を書かなかった。)

否定推量形は前述したように非過去形あるいは基幹に「マー」が後接する形や非過去否定形に「ジャロー」が後接する。

否定仮定形は否定過去形の「カカンカッタ」「カカナンダ」の「タ」「ダ」に代えて「タラ」「ダラ」を後接させて作る。

- ・モシ タローガ テガミュー {カカンカッタラ／カカナンダラ} コマル。(もし太郎が手紙を書かなかったら困る。)

〈とりたて否定形〉

とりたて否定形は多段型では「書きはセン」の連母音が融合し、「カキヤーセン」のようになる。多段型では「セン」に前接する形が仮定形と同形のため、「死ぬ」「見る」「来る」「する」においても類推による平準化が起こり、「シヌリヤーセン」「ミリヤーセン」「クリヤーセン」「スリヤーセン」のように「仮定形+セン」となる。この点においてr語幹化が進んでいるといえる。

- ・テガミヤコ カキヤーセンデ。(手紙なんか書きはしないよ。)
- ・ソネーニ マッテモ タローワ クリヤーセンデ。(そんなに待っても太郎は来はしないよ。)

〈丁寧形〉

「マス」を後接させて作る。多段型動詞では基幹イ段形、一段型動詞では基幹、「来る」では基幹オ段形、「する」では基幹イ段形に後接する。

〈使役形〉

共通語と同じく「セル」または「サセル」が後接する形のほか、「ス」または「サス」が後接する形もある。多段型動詞では基幹ア段形、「スル」では基幹ア段形に「セル」「ス」が後接し、一段型動詞では基

幹、「来る」では基幹オ段形に「サセル」「サス」が後接する。

高年層には一段型動詞と「来る」に「ラセル」を後接させた形も聞かれる。

- ・ハナコニ ヒトリデ ニュースオ {ミサセル／ミサス／ミラセル}。(花子に一人でニュースを見させる。)

「セル」「サセル」「ラセル」の形は一段型動詞、「ス」「サス」の形は多段型動詞と同様の活用をする。

〈受身形〉

多段型動詞と「する」では基幹ア段形に「レル」を、一段型動詞では基幹、「来る」では基幹オ段形に「ラレル」を後接する。

受身形の活用は、一段型動詞と同様である。

〈可能(肯定・否定)形〉

可能形は「カケル」「ミレル」「コレル」のような形のほか、一段型動詞と「来る」には基幹に「ラレル」を後接させる「ミラレル」「コラレル」のような形もある。「する」は語彙的に「デキル」を用いる。

可能否定形では可能肯定形と対応する形として「ン」を後接させる「カケン」「ミレン」「コレン」や「ミラレン」「コラレン」がある。「する」は「デキル」の否定形「デキン」を用いる。そのほか、「ヨーカカン」「ヨーカケン」のような「ヨー+否定形」と「ヨー+可能否定形」も存在する。これは能力可能・心情可能の否定形として用いられる。

- ・ムズカシー カンジワ {ヨーカカン／ヨーカケン}。(難しい漢字は書けない。)
- ・ホラーエーガワ コウオーテ {ヨーミン／ヨーミレン}。(ホラー映画は怖くて見れない。)

〈尊敬形〉

多段型動詞と「する」では基幹ア段形に「レル」、一段型動詞では基幹、「来る」では基幹オ段形に「ラレル」が後接する。そのほか、高年層には基幹に「ンサル」を後接させた「カキンサル」などの形や、「カイトジャ」など中止形を用いる、いわゆる「テ敬語」の形も聞かれる。

- ・センセーガ テガミュー {カカレル／カキンサル／カイトジャ}。(先生が手紙をお書きになる。)

〈継続形〉

多段型動詞の基幹音便形、一段型動詞の基幹、「来る」「する」の基幹イ段形に「トル」が後接した「カイトル」などが結果継続を表す。

- ・太郎は三冊も本を書いとる。(太郎は三冊も本を書いている。)

動作の進行を表す形として、多段型動詞、「来る」、「する」の基幹イ段形、一段型動詞の基幹に「オル」が後接して融合した「カキョール」「ショール」のような形が用いられる。高年層では「カキユール」「ミユール」のような形も聞かれる。

- ・タローワ イマ テガミュー {カキョール / カキユール}。(太郎は今手紙を書いている。)
- ・ハナコワ イマ テレビオ {ミョール / ミユール}。(太郎は今テレビを見ている。)

〈希望形〉

多段型動詞、「来る」、「する」の基幹イ段形、一段型動詞の基幹に「たい」の連母音融合形「テー」を後接させて作る。形容詞に準じた活用となる。

- ・ミナデ コノシゴトー シテー。(みんなでこの仕事をしたい。)

〈のだ形〉

連体形に「ンジャ」を後接させて、「カクンジャ」「ミルンジャ」「クルンジャ」「スルンジャ」のようになる。「ジャ」言い切りの形は単なる情報の提示では現れにくく、気づきや納得、命令の意味で用いられることが多い。

「カクンヨ」「カクンデ」「カクント」など、終助詞「ヨ」「デ」や伝聞を表す「ト」が後接する場合には「ジャ」を伴わず「ン」に終助詞が後接する。

- ・マンネンヒツ アル？ センセーニ テガミュー カクンヨ。(万年筆ある？先生に手紙を書くんだよ。)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の活用型は一つである。中止形、否定形、なる形において、語幹末が a と i の場合に交替語幹が用いられる。a の場合、アカ>アコ (赤い) のように語幹末母音を a から o に変える。i の場合、オーキ>オーキュ (大きい) のように、語幹末母音を i から ju に変える。これらは実際に用いられるときは

「アコーナル」など全て長音形となり、語幹末母音が u、o の場合は「ワルーナル」など語幹の長音形が用いられる。語幹末母音が e の語はない。

「濃い」「酸い」は語幹が2拍の「コイー」(「コユイ」の融合形)「スイー」であり、活用は一般の形容詞と変わらない。

語幹末母音	交替後	例
a	o	赤い アコーナル 怖い コウオーナル
i	ju	大きい オーキューナル 嬉しい ウレシュューナル
u		悪い ワルーナル
o		良い ヨーナル 重い オモーナル

〈断定非過去形〉

語幹に「イ」を後接させた形の連母音が融合した形を用いる。「大きい」のように語幹末母音が i の場合は長呼し、語幹末母音が a、o の場合は「アカイ (赤い) >アケー」「オモイ (重い) >オメー」のように eR となり、u の場合は「ワルイ (悪い) >ワリー」のように iR となる。語幹末母音が e の語はない。

語幹末尾がヤ行音の場合には「ヨイ (良い) >エー」「コユイ (濃ゆい) >コイー」のように、連母音が融合する際にア行音と同形になる。

語幹末母音	例
a	赤い アケー 怖い コエー
i	大きい オーキー 嬉しい ウレシー
u	悪い ワリー
o	良い エー 重い オメー

〈断定過去形〉

語幹に「カッタ」を後接させる形があるほか、若年層では語幹の連母音融合形の短呼形に「カッタ」が後接し、「アケカッタ」「エカッタ」のようになる形も使用される。

- ・キノー コータ トマトワ {アカカッタ / アケカッタ}。(昨日買ったトマトは赤かつ

た。)

〈推量形〉

断定形に「ジャロー」を後接させた「アケージャロー」のような形と、語幹に「カロー」を後接させた「アカカロー」のような形がある。若年層には連母音融合形の短呼形に「カロー」を後接させた「サミカロー」のような形も聞かれるが、これは語によって使用差があり、使用頻度の高い語で現れやすい。

- ・アシタワ {サミージャロー／サムカロー／サミカロー}。(明日は寒いだろう。)
- ・アノ ニモツワ {オメージャロー／オモカロー／×オメカロー}。(あの荷物は重いだろう。)

過去推量形では断定過去形に「ジャロー」を後接させて「アカカッタジャロー」のような形を作る。または語幹に「カッター」を後接させて「アカカッター」のような形を作る。

- ・キノー コータ トマター {アカカッタジャロー／アケカッタジャロー／アカカッター／アケカッター}。(昨日買ったトマトは赤かっただろう。)

なお、古くは根拠に基づく推定を表す形として「アカカリソーナ(赤そうな)」という形があったようであるが(虫明 1982)、現在では聞かれない。

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形である。語幹に「イ」を後接させ、さらに連母音が融合した形を用いる。

- ・アケー トマトー カウ。(赤いトマトを買う。)

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形と同形である。語幹に「カッタ」を後接させる形と語幹の連母音融合形の短呼形に「カッタ」を後接させる形がある。

- ・キノーマデ {アカカッタ／アケカッタ} ミガクローナッテ シモータ。(昨日まで赤かった実が黒くなってしまった。)

〈中止形〉

中止形では語幹または交替語幹の長音形に「テ」を後接させる。語幹末母音が a, o の場合はオ段長呼、語幹末母音が i の場合はウ段幼音の長呼、u の場合はイ段長呼となる。

- ・コノ カミヤー アコーテ、アノ カミヤー

シレー。(この紙は赤くて、あの紙は白い。)

〈仮定形〉

語幹に「ケレバ」の融合形「ケリヤー」または「カッター」を後接させて、「アカケリヤー」「アカカッター」のような形となる。

- ・モシ ミガ アカケリヤー トロー。(もし実が赤ければ採ろう。)

動詞同様、古くは文中の疑問詞を文末で受けて疑問文を表す用法もあったが、現在ではあまり聞かれない。

〈否定形〉

中止形と同様の語幹または交替語幹の長音形に「ネー」を後接させる。

- ・マダ ミガ アコーネー。(まだ実が赤くない。)

〈なる形〉

中止形と同様の語幹または交替語幹の長音形に「ナル」を後接させる。

- ・モージキ ミガ アコーナル。(もうすぐ実が赤くなる。)

〈丁寧形〉

語幹に「イ」を後接させた融合しない形に「デス」を後接させる。丁寧形では「アケーデス」などの融合形にはならない。

〈のだ形〉

「アケーンジャ」「アカカッタンジャ」のように、断定形に「ンジャ」を後接させて作る。動詞と同様、「アケーンヨ」「アケーンデ」「アケーント」のように終助詞「ヨ」「デ」や伝聞を表す「ト」が後接する場合には「ジャ」を伴わず「ン」に終助詞が後接する。

- ・コノ トマター ナカマデ {アケーンジャ／アケーンヨ／アケーンデ／アケーント}。タバテミー。(このトマトは中まで {赤いんだ／赤いんだよ／赤いんだぞ／赤いんだって}。食べてみて。)

「ジャ」言い切りの形が単なる情報の提示では現れにくく、気づきや納得、命令の意味で用いられることが多いのも動詞と同様である。

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

断定非過去形では形容名詞述語、名詞述語ともに

「ジャ」を後接させる。高年層には形容名詞述語に「ナ」を後接させた「シズカナ」のような形も聞かれる。理由を表す「ケー」、逆接を表す「ケド」、終助詞「ナー」「ノー」が後接する場合も「シズカナケー」「シズカナケド」「シズカナ {ナー/ノー}」となる。

- ・コノ ヘヤー {シズカジャーナー/シズカナナー/シズカジャーノ/シズカナノー}。(この部屋は静かだなあ。)

〈断定過去形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ジャッタ」が後接し、「シズカジャッタ」「学生ジャッタ」のような形をとる。

形容名詞述語では、高年層において非過去形「シズカナ」に「カッタ」を後接させた「シズカナカッタ」も聞かれる。また、古くは「シズカニアッタ」のような形もあったが、現在では聞かれない。

- ・アッチャー {シズカジャッタ/シズカナカッタ} デ。(あっちは静かだったよ。)

〈推量形〉

「シズカジャロー」「学生ジャロー」のように、形容名詞述語、名詞述語ともに「ジャロー」が後接する。

形容名詞述語では、高年層に断定非過去形「シズカナ」に「カロー」が後接した「シズカナカロー」のような形もある。

- ・アッチャー モット {シズカジャロー/シズカナカロー}。(あっちはもっと静かだろう。)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は形容名詞述語では形容名詞に「ナ」を、名詞述語には述語としての形はなく、名詞に助詞「ノ」を後接させる。

- ・シズカナ ヘヤニ オル。(静かな部屋にいる。)
- ・イマモ ガクセーノ トモダチ。(今も学生である友だち。)

〈連体過去形〉

連体非過去形は断定過去形と同形である。「ジャッタ」が後接し、「シズカジャッタ」「学生ジャッタ」のような形をとる。

- ・サッキマデ シズカジャッタ ヘヤガ ウルソーナッタ。(さっきまで静かだった部屋が

うるさくなった。)

〈中止形〉

形容名詞・名詞に「デ」を後接させ、「シズカデ」「学生デ」となる。

〈仮定形〉

形容名詞、名詞に「ナラ」が後接する形のほか、「ジャッター」が後接する「シズカジャッター」「学生ジャッター」のような形もある。

形容名詞述語では、古くは「シズカナケリャー」のような形もあったが(虫明 1982)、現在ではあまり聞かれない。

〈否定形〉

形容名詞、名詞に「ジャー」を後接させて「シズカジャー」「学生ジャー」のような形を作る。形容名詞では「ニネー」を後接した「シズカニネー」などの形もある。「シズカジャー」のように、「ジャ」を長呼する場合はとりたて否定形となる。

- ・タローワ {ガクセージャー/ガクセージャーネー}。(太郎は {学生でない/学生ではない}。)

〈なる形〉

形容名詞、名詞に「ニナル」を後接させる。「ニ」が「ン」に変化して「シズカンナル」「学生ンナル」と発音される場合もある。

- ・タローワ センモンガッコノ {ガクセーニナル/ガクセーンナル} ンジャテー。(太郎は専門学校の学生になるんだって。)

〈丁寧形〉

形容名詞、名詞に「デス」を後接させ、「シズカデス」「学生デス」のような形を作る。

形容名詞述語には「シズカナデス」の形もある。

〈のだ形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「シズカナンジャ」「学生ナンジャ」のように、連体形に「ンジャ」を後接させる。

伝聞を表す「ト」が後接する場合には「ジャ」を用いず、「シズカナント」「学生ナント」のようになる。「デ」「ヨ」が後接する場合には「シズカナンデ」「学生ナンヨ」のような連体形に「ンデ」「ンヨ」の形で後接するほか、「シズカデ」「学生ヨ」のように形容名詞・名詞に直接付く形もある。形容名詞の場合、高年層には「シズカナデ」「シズカナヨ」のよう

な形も聞かれる。

- ・タローワ マダ ガクセーナンジャ。(太郎はまだ学生なんだ。)
- ・ムコーノ ヘヤーエーデー。 {シズカナンデー/シズカナデー/シズカナンヨー/シズカナヨー}。(向こうの部屋はいいよ。静かなんだよ。)

動詞、形容詞と同様に、「ジャ」言い切りの形が単なる情報の提示では現れにくく、気づきや納得、命令の意味で用いられることが多い。

参考文献

- 岡山県大百科事典編集委員会・山陽新聞社出版局編
 (1980)『岡山県大百科事典(上・下巻)』山陽新聞社
- 鏡味明克(1979)「地域別方言の特色 岡山県」『全国方言基礎語彙の研究序説』明治書院
- 鏡味明克(1992)「各地方言の解説 岡山県方言」『現代日本語方言大辞典第1巻』明治書院
- 虫明吉治郎(1982)「岡山県の方言」『講座方言学8 中国・四国地方の方言』国書刊行会
 (小島裕将)